

哲學研究

第百九十四號

第十七卷
第五號

カント就職論文考

天野貞祐

一

哲學者のうちには比較的早期に且つなだらかにその人固有の思想を把捉し、これを一層嚴密にし或は布衍することが主要な事業であつたやうな類型があると同時に、他方にはその獨異な思想を展開し來るまでに永い力闘摸索の過程を有する類型があるといへるであらう。前型哲學者の思想に變化發展が無く後型哲學者の思想發展の諸段階に脈絡が無いといふのではないけれども、その大體の傾向から見て斯かる類型を考へるならば、カントはいふ迄もなく後の類型の最典型的な哲學者である⁽¹⁾。様々なる顛倒⁽²⁾ (mancherley Umkipungen) といふカント自身の告白が最もよくこの間の消息を語つて居る。従つてカントの思想發展を種々の時期に區劃することは固より可能である。然し時期の區劃は誇張されてはならぬ。變化の側面へ注目

する餘り、變るものの根柢に横はる變らざるものを見失ふならば思想の發展は理會し難くなる。嘗つてライブニッツやヒュームのカントに及ぼした影響の時期がカント研究の中心問題であつた頃のカント解釋は、外的影響を此處に在り彼處に在りと指示することによつて思想發展のこの不可解を救はんとしたものだといへると思ふ。カントが外的影響に敏感であつたことは事實である。彼は「何ものにも執著せず、自分の見解に對しても他人のそれに對しても深い無關心をもつてしばしば建築物を顛倒したのである」^(三)。けれどもいはゆる「Unkippen」はかれの哲學的意圖そのもの、世界觀そのものの顛倒をば意味せずして哲學的意圖を實現する仕方に關するものである。試みに我々が批判前期の最も早い時期にぞくする最重要著作「天體の一般的自然史及び理説」(一七五五年)^(四)と批判期の最も圓熟せる著作「判斷力批判」(一七九〇年)とを對比するならば、兩者に現れたる哲學的意圖に於て、しかのみならずその解決の仕方に關してさへも驚くべき一致を見出し、カントの全思想發展を貫流するものを認めざるを得ないであらう。自然研究の時期といふも、自然の現象に止まる者には第一原因の認識が永久に閉される^(五)ことを認め、「光をとます」ところの形而上學を要望して居る、自然の機構を明らかならしめることによつて、自然を越えんとした

のである。經驗論の時期といふも心の經驗心理學的考察を通じて心の背後に横はるものを把握せんとする意圖を示して居る。彼にとつては自然も單なる自然ではない、その秩序に於て神を見ることのできる自然である。心も單なる心ではない、神に通ずる心である。自然を通じ心を通じて絶對者へ遡らんとしたのである。懷疑論の時期といふも在來の形而上學的方法に對する懷疑たるに止まる。批判期に於ても哲學を科學理説に解消したのではなくして科學的知識の十分なる權能と共にその限界を究明することによつて形而上學的領域に場處をつくつたのである。機械論と目的論、自然科學と形而上學、知識と信仰、これらの何れに對しても十分なる權能を保證し、その領域を確立することが諸々の時期を通じて一貫せるかれの哲學的意圖であつた。彼をもつて一個の自然理説者と見ることの不當なるはいふ迄もない。その自然理説の根柢には形而上學的情熱がもえて居る。とは云へかれの哲學に對する自然の、しかも機械的自然の威力を忘れ、彼に於て自然とその理説とに無關心なる形而上學者を見んとする者はかれのせおふ哲學的運命に對して盲目であるといはねばならぬ。古代へのルネサンスによつて自然に、知識に、科學に目覺めた近代がかれの哲學の地盤である。機械的自然の桎梏にくるしみ生命との調和を喘ぎ求め

る十八世紀の精神がかれの哲學精神である。彼は中世の哲學者でないのみならず、近代思想を止揚し、いはゞ中世へのルネサンスによつて神に、人間に、歴史に、社會に目覺めたる現代の哲學者でもないのである。カント哲學は飽くまでも近代的である、自然が、しかも數學科學的自然が嚴然たる威力をもつて迫つた時代の哲學である。彼にとつては神は自然を超絶してゐない、神は自然の秩序に於て見られる、自然としての心に於て顯現する。人間は單なる社會的存在ではない、自然に繋がれたる存在である。如何なる意味に於て人間は自然者であり超自然者であるかが問題である。世界は廣義の自然なのである。近代的なることに於てこそカント哲學の課題と使命と従つてまた制限とが成立するのである。

こゝに私が考察せんとするカントの就職論文「可感界並に可想界の形式と原理と」について「二七七〇年」は「様々なる顛倒のうち特に重要なものと認められる、しかも通説によれば「視靈者の夢」(二七六六年)に於てひと度批判精神に目覺めたカントが外からの影響によつて獨斷論へ逆轉せるもので、この獨斷論的思想の清算になほ十年の沈潜が要求せられたといはれる。然し私は就職論文の成立に對して一定の年における一定の人の影響といふ種類の外部的影響を特に必要とする理由を認めない。

それはもろ／＼の影響を思索と體驗との坩堝のうちに溶しつゝ進展する思想の流れの一段階として十分に理會できると思ふ。

周知の如くカントは一七七〇年九月ラムベルトに對して——擴張する必要はあつても、もはや變更する心配のないところの學說に到達してからかれこれ一年になつて、これによつて凡ての種類の形而上學的課題が全く確かな、そして容易な表徴によつて吟味され、その解決の限界が確實に決定されることができると報じて居る。^(八)これと關聯した手記には、「この教説は初めには私にぼんやり見えるだけだつた。諸命題とその反命題とを本氣に解決しようをやつてみた。懷疑論を組立てようといふのではなく、悟性の幻惑を豫想してゐたので、その本據をつきとめようとしたのだ。六十九年が私に大なる光明を與へた」とある。^(九)いはゆる Grosses Licht が空間時間の觀念性を意味することについては特に論述を要しないかと思ふ。當時「大なる光明」をカントに於て惹起した史的制約に關しては、Das Jahr 69 gab mir grosses Licht. といつても、だから直ちに外的影響を認めねばならぬといふ理由は毫も存しない。思想の成熟と考へる方が遙かに自然的である。就中ヘーミムの影響をこの時期に認めんとする説の根據は薄弱である。この説の提唱者たるパウルゼン^(十)自身がカントの思

想發展を理會するには六十年代の初に於ても終に於ても必ずしもヒュームの影響を認めることを必要としないと考へ、しかも「プロレゴメナ」におけるヒュームの影響に關する告白は六十年の終以外に認める時期がないといふに止まる。然し「獨斷のまどろみからの覺醒」といふ言葉は一時にさし込んだ光と解せずして次第に展開し來つた思想の成熟と解すればよいのである。一七六五年に出版されたライプニッツの「新論」^(一)の影響をもつて決定的と認める説^(二)に對しては私はマックス・ヴント^(三)と共に斯う考へる。「感性的悟性的認識の區別に關係してはライプニッツの名が擧げられてゐない。ライプニッツの感性的事實眞理と概念的悟性眞理との區別が全く異つた殆んど反對の意味に於て行はれたことを考へるならば、それはまた怪しむには足らない」。「且つまたカントはかの區別を今初めて出版されたライプニッツの著書から新に學ぶ必要はなかつた、それはラルフ哲學へ傳へられてドイツ思想の共有財産となつて居た。カントの論駁もラルフに對して、しかも當然期待される如く全然否定的意味に於て爲されたのであつた」と。それで私は就職論文成立の問題に關してはアンテイノミの課題にその原動力を有する思索が諸々の影響を受け入れつつ一方に於て空間時間の觀念性の説に導き、他方に於てはカントが特に六十年代に

於て示した古代哲學への關心と研究とが單に感性的悟性的認識といふ主觀の側における區別に止まらず *mundus sensibilis* と *mundus intelligibilis* といふ對象的區別を明確に把握し表現することを促進したのであらうと思ふ。^(十世)

「純粹理性批判」と就職論文との關係についても私は兩者の間に哲學の本質にかゝる變轉を認めない。就職論文に於て獨斷論的殘餘といはれるを常とするものが多くはカント哲學の本質的なもので従つて批判的思想の根柢に生き動いて居ると思ふ。以下就職論文の本文を點檢して右の解釋に對する根據を尋ね度い。

- (一) Johannes Volckel, Schopenhauer 3. Aufl. S. 16.
- (二) Kants Brief an Lambert vom 31. Dezember 1765.
- (三) Kants Brief an Herder vom 9. Mai 1768.
- (四) Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels 1755.
- (五) *Monadologia physica*; Praenotanda.
- (六) *De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis* 1770.
- (七) *Träume eines Geistesehers*, erläutert durch die *Träume der Metaphysik* 1766.
- (八) Kants Brief an Lambert vom 2. September 1770.
- (九) *Reflexionen*, Ausgabe vom B. Erdmann II. Nr. 4.
- (十) Paulsen, Kant 5. Aufl. S. 102 ff.

(十四) Leibniz, *Nonvan essai sur l'entendement humain* 1704.

(十五) Windelband, *Geschichte der neueren Philosophie* II. 5. Aufl. S. 31 ff.

(十六) Max Wundt, *Kant als Metaphysiker* (1924) S. 160 f.

(十七) 私はこゝに諸説を詳論しない。それについてはフィッセル、リール、カッシェル、グント等のカント書、フアイヘンゲルの註釋書、邦譯「可感界並に可現界の形式と原理と」に就いて「における武田氏の研究を參照されたい。

二

「世界一般の概念について」論ずる第一章に於て先づ注目すべきは、その研究が形而上學の方法の一層深い認識に役立つ故をもつて、人間精神の本性に由來する二種の對象産出 (genesis) が説かれてゐることである。一は抽象的悟性概念による思惟的な仕方、他は理性の課題たる普遍概念を感性的認識能力によつて判明な直觀に於て具體化する直觀的な仕方である。前の仕方をもつてすれば我々は單純者をも世界をも、詳しくいへば複合的實體の分析が行きつくところの全體ならざるものをも、その綜合が終止するところの部分ならざるものをも把捉することができぬ。然るに人間精神の直觀は時間に制約されてゐる故に第二の仕方では分析も綜合も完結するわけにゆかぬ、思惟によつては捉へられる單純者や世界は人間精神にとつては直觀に於て具體化されることができぬ。即ち悟性によつて受取られた抽象的表

象を具體的に描き出し、直觀たらしめることが精神にとつてしばしば不可能なのである。こゝに人間の精神が制限を有つて居る。「普通に表象できないことをもつて不可能な」と同意義なりとするのは早計にも、人間精神の制限をもつて物自身の本質の制限と看做すからである。何れかの主體の一定の法則に合致せぬものは、だからといつて一切の思惟的把握を越えるわけではない、人間の悟性のやうに「尺度を繼續的に用ゐずとも一目で數多を通觀できる悟性」も可能だといへるであらう。それ故に純粹理性の對象が人間精神の直觀的認識の法則に適合せぬ故をもつて直ちにこれを不可能となすは甚しき迷妄に陥れるものといはねばならぬ。

斯の如く就職論文に於て最初に問題とされるのがアンテイノミーの課題であることはその十分なる理由を有つ筈である。いつたいカント哲學の生れた時代にあつては形而上學と自然學との間に容易には克服され難い對立が支配してゐた。學派哲學の宇宙論によれば世界は限界を有し、しかも單純體から成立する、換言すれば世界は綜合に關しても分析に關しても限界を有する、これに反して科學は空間の無限なる延長と物質の無限なる可分性とを主張する、即ち綜合に關しても分析に關しても世界の無限性を説く。この對立を克服することこそまさに十八世紀の認識論

的形而上學的課題であつた。時代のこの課題がまた上に述べた如くカント自身の課題であつた。彼の言ふ所によればかれの「出發點は神の存在、永生等の問題の研究ではなくして純粹理性のアンテイノミーであつた、これが初めて獨斷のまどろみから覺まして理性批判そのものへ驅つたのである」⁽¹⁾。既に「自然單子論」に於ては「空間をもつて實體性を所有せず、統一せられるモナッドの外的關係の單なる現象 (phaenomenon) である」⁽²⁾第四命題系となし、これを充すところの形而上的實體と區別し、空間の無限的可分性を認めると共にモナッドの單純性を確立してもつて幾何學的自然學と形而上學との對立を調和せんと試みた。然るに「空間における場處區分の第一理由について」⁽³⁾二七六八年に於てはこのライブニッツ的空間論を捨てニュートンに従つて空間の絶對的實在性を承認した爲めに「自然的單子論」におけるアンテイノミーの解決も放棄せられねばならぬこととなつた。一見すると六十八年の論文は五十六年の論文よりも問題の解決から遠ざかつたかに見える。然しそれは思索途上の逆行ではなくしてより高い解決を獲得せんがための進行である。蓋し「絶對空間が一切の質料の現存在から獨立であつて、質料の關聯を可能的ならしめる第一根據としてそれ自身の實在性を有し」空間の諸限定は質料の部分相互の位置を根據とする

ものではなく、後者が前者を根據とすることゝ明らかにせられ、空間の根源性が把握された以上、客觀的根源性を主觀的根源性へ轉じて絶對的根源的空間の思想から根源的感性的空間直觀の思想へ移る途が開かれたからである。こゝに於てアンテイノミーの課題が新なる迫力をもつてカントの思索にその解決を強要したことは極めて自然的といはねばならぬ。就職論文がアンテイノミーの課題をもつて始まる所以なのである。

この時期にあつてはアンテイノミーの課題は特に無限性及び全體性に關係する、換言すればいはゆる數學的アンテイノミーの形をとつて居る。然しこゝではもちろん數學的と力學的との區別はなく、あらゆる二律背反性の問題が無限性に關するこのアンテイノミーの問題に於てふくまれてゐるのである。それでなければこの問題がカント哲學の原動力たる力を有つわけにはゆかぬ。問題は單に空間が無限の可分性、延長性を有するかといふに止まらずして不可分的なもの、全體的なもの、換言すれば空間時間的繫縛の外にあるものの存在が關心の中核なのである。そこにこの課題の迫力と、従つてまたこの課題の解決によつて自然學と形而上學との對立を克服し能ふ根據が存するのである。この時期におけるアンテイノミーの課題を

單に數學と關係さして考へたのではこゝに時代の課題にして同時にカント自身の課題としてかれの哲學の根本動力であつた課題の意味を十分に理會できないと思ふ。就職論文では一に凝收してゐた課題が「純粹理性批判」では全體者、單純者、自由者と力學的として區別し、この二種類のアンテイノミーに對して全然逆な解決法を採つて居る。元來課題そのものは斯の如く反對した解決法をとらねばならぬ論理的必然性を要求しない。數學的アンテイノミーに對しても力學的アンテイノミーに對すると同じく、主張と反主張とをその關はる對象界の區別によつて共に成立せしめることは可能である。就職論文の立場からはこれを可能とせねばならぬ。然もカントが批判に於ては兩種のアンテイノミーに對して全然異なる解決法を採つたのは第三第四のアンテイノミーを就職論文の立場に於て處理すれば、これによつて既に形而上的領域を確立するに十分なるが故に、第一第二のアンテイノミーは全く自然科学的關心のみから處理したものと考へられる。アンテイノミーの課題にもる力に關してもその解決の方法に關しても兩著を通じて同じ思想の流れが貫いてゐるといはねばならぬ。

斯くして我々は可感界と共に可想界を認めねばならぬ。可感界をもつて唯一の世界なりと主張する者があるならば人間が人間たることを忘れることである、人間の精神の制限を知らざることである。悟性は決して比量的でなければならぬわけはない、直観的なることも可能である。後に批判期に至つて重大なる役割を有たねばならぬところの直観的悟性が就職論文最初の節に於て説かれてゐることもまた我々の看過し能はざる事柄にぞくする。人間精神にとつては可想界は單なる思惟の對象である、この悟性に對してはしかし具體的な對象界でなければならぬ。第二節に於ては斯くして捉へられたる可想界の構造について、換言すれば「世界の定義に於て注意せらるべき限定について」述べられて居る。(未完)

(一) Kant's Brief an Garve vom 21. September 1798

(二) Von den ersten Grunde des Unterschiedes des Gegenden im Raume 1768.